

米欧巨大財閥

VS

中国共産党政権

金融アナリスト
永山卓矢

【米次期政権の対中強硬姿勢の黒幕とは？】

トランプ次期米大統領やその政権移行チームによる中国に対する強硬姿勢が目につく。

通商政策面では、元より大統領選挙戦中から中国を為替操作国に認定し、同国の製品に45%の関税をかける事を主張していた。さらに新政権の発足を前に、貿易政策を統括する国家通商会議の議長に、対中強硬派のナバロ・カリフォルニア大学教授を起用する事も発表された。

外交・安全保障面でも強硬姿勢が目につく。極右扇動家として有名なバノン次期首席補佐官・上級顧問が中心になり、中国との国交樹立に動いたニクソン政権の外交政策を否定する路線が密かに検討されているようだ。大陸中国の一元独裁体制を維持して人権を抑圧する共産党政府は非合法的に国民党政府から政権を奪い取った「ならず者の犯罪者」であり、民主的な政権交代を認める台湾の政府こそが正当な中国の政権であるという論理だ。

こうした動きに危機感を強めているキッシンジャー元国務長官は12月2日に現・次期政権スタッフに無断で訪中、習近平国家主席と善後策を協議した。ところがその会談の最中に、トランプ次期大統領が台湾の蔡英文総統と電話協議をしている。次期大統領は後のインタビューで、総統から祝意の電話があったのでそれに応じただけだと「とぼけて」いたが、本当は元長官が会談をしている時に次期大統領側から意図的に電話をかけたという。

こうした米次期政権の対中国強硬姿勢の背景にはトランプ次期政権の背後に存在する米欧ユダヤ系巨大財閥の意向があるようだ。米系巨大財閥傘下のエクソンモービルや軍需産業系が親イスラエル保守派と連携し次期政権を支えている一方、ゴールドマン・サックスを介し欧州系巨大財閥もその屋台骨を支えている。

【同床異夢の関係にある米欧巨大財閥】

ここで注目されるのが欧州系巨大財閥の動きだ。この財閥は以前、キャメロン政権(当時)を後押しして英国をアジアインフラ投資銀行(AIIB)に資本参加をさせたように、「一帯一路」構想を提唱していた習国家主席主導の中国と提携して、新興国のインフラ事業を次々に請け負っていきこうとした。それにより、ユーラシア大陸に同財閥の影響力が強い巨大な経済圏を構築する事で、米系巨大財閥が主導権を握る米世界覇権国に対抗しようとしたわけだ。人民元を国際通貨基金(IMF)の特別引き出し権(SDR)の構成通貨に加えようとしたのも、中国が保有している外貨準備の信用を背景に新興国のインフラ事業のプロジェクトを立ち上げようとしたからだ。

ところが、中国では人類史上、未曾有の超巨大バブルが積み上がったおり、国内外で天文学的な規模の債務を抱えている実態が明らかになるにつれ、欧州系財閥はそれを諦めたようだ。

それに代わり、中国でバブル崩壊を促進させながら、資本取引の自由化やその対外開放も迫る事で国有銀行を買収していく路線に舵を切ったという。そうする事で、長期的にはいずれ世界覇権が米国から中国に移る事が見込まれる中で、米系財閥に対して有利に立とうという戦略に転換したわけだ。以前、それまで反対していた米国が人民元のSDR入りに賛成の姿勢に転じたのも、そうした欧州系財閥の動きと密接な関係がある。

一方米系財閥としては、世界中の中央銀行による過剰な緩和策による流動性供給手段が限界に突き当たった中で、より財政政策の役割を高めていこうとしている。財政政策といえば、公共インフラ事業や減税以外に、究極の需要創出策が国防費を大幅に増額する事になる。それにより、イスラム教徒を敵視し「対テロ戦争」を強化するだけでなく、中国を敵視して「新冷戦」構造を構築しようとしている。

いわば、この二大巨大財閥はともにトランプ次期政権を支えて反中国的な姿勢を見せているが、その実態は「同床異夢」の関係にあるわけだ。

だとすれば、欧州系財閥としてはドル高傾向を推し進めて中国から資本流出を促進させ、人民元安傾向を後押しした方が有利である。中国発の信用不安といえ、昨年8月11日の人民元切り下げを機に、また年明け以降、FRBの利上げ推進姿勢を背景に、米系投機筋が2回にわたり人民元や中国株を売り崩した事で引き起こされたのが想起される。当時は中国が習国家主席主導で経済的には「一帯一路」構想を、安全保障面では南シナ海に強引に軍事基地を建設するなど積極的に対外膨張路線を推進していた中で、米国がそれに対抗して「金融攻撃」を仕掛けたわけだ。

【FRBの利上げ推進の意図するもの】

そこでカギを握るのが、米系財閥直系シティ・グループの系列にあるフィッシャー副議長が主導権を握るFRB執行部の動向である。この系列は、大統領選挙中にはクリントン前国務長官を支持し、その当選を後押しするような金融政策姿勢を推進していた。

ところが今では副議長をはじめとして、権力者層の意向に従う傾向が強い地区連銀総裁がこぞって財政出動政策に賛成し、利上げの加速にも前向きな姿勢を示している。イエレン議長が完全雇用に近い現状での財政出動政策に疑念を示し、労働市場のパイを拡大させるためにインフレ傾向を部分的に許容する「高圧経済」を提唱しているのとは対照的だ。

中国人民銀行はこれまで、人民元安圧力に抗して外貨準備を取り崩し、懸命に元買い介入を繰り返してきた。ところが、それに伴って市中に元資金を供給すると、習政権が反腐敗運動を繰り返している中でその資金は全く民間投資に回らず、政府の「ひも付き」の公共事業か不動産投資にばかり流れていた。

このため、中国経済は全体的にバブルが崩壊しつつある中で、都市部の不動産市場のバブル化が進むという「珍現象」が生じていた。これが破裂すると深刻な事態を引き起こしかねないため、9月4～5日に中国・杭州で開催された主要20カ国・地域(G20)首脳会議(サミット)で、人民銀行が供給した流動性が不動産市場に流れないように、今後はある程度は人民元安を放置する代わりに介入を抑制する事が裏側で合意されたという。

ところが、その後FRBによる12月の利上げ観測が現実味を帯びてドル高圧力が強まったため、ある程度の人民元安が進むのを許容しながらも相応の介入に動かざるを得なくなった。それにより、11月末の中国の外貨準備は前月末比691億ドルも減っており、米財務省が発表している対外居住者の米国債保有動向でも、10月末の同国の米国債保有額は同413億ドルも減少して日本に抜かれて2位に転落している。さらに大統領選挙が終わった11月9日以降、勢いよくドル高が進んでいるため、外貨準備や米国債保有額が一段と相当に減っているのは確実である。

そこで中国政府は不動産価格の高騰と外貨準備の激減をともに抑えるため、人民銀行が引き締め気味の金融政策に舵を切る一方で、外貨送金の届け出が必要な金額を5,000万ドル以上から500万ドル以上に大幅に引き下げるなど、資本流出抑制策を強化した。

それでも、ドル高圧力が根強い中で資本流出に歯止めがかかりそうもない。

足元ではイタリアを中心に欧州で銀行不安が高まっているが、一元独裁体制下の中国では政府(人民銀行)が資金繰りが悪化して経営危機に見舞われる国有銀行にすかさず流動性を供給する姿勢を示しているため、当面は危機に陥らずに済みそうだ。ただし、それには人民元が信用できる通貨であることが絶対的な条件であり、それを担保しているのが基軸通貨ドルによって裏打ちされた外貨準備である。介入を繰り返すことで外貨準備が激減し続ければ、人民元が信用を喪失する日が必ず到来してしまう。

米欧二大ユダヤ系財閥の同床異夢的な攻勢を中国の共産党政権が凌げるか、構造改革の断行に向けて時間的猶予はない。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

テクニカル

大発会大幅続伸の期待

2016年の日経平均株価の波動形態は先週述べた如く1995年型タイプ。年央に年間安値をつけ、年末年始同レベルのイッテコイ型。現段階では年末年始2万円を想定しているが、ここまで7週連続陽線。1～2週程度の調整が入りそうにも見える。週足ストキャスティクスから見れば、%Dが97.60まで上昇しており、極端な買われ過ぎゾーンに入っている。来週以降はこのストキャスティクスが下降に転じ始めると、相場の上昇も一呼吸置くだろう。ただ年末最終週、掉尾の一振が入れば、500円高程度はありそうだ。

このまま一気に行くかどうかは判らないが、懸念は今年同様年初から下げる相場であるが、2年続く可能性はないと見て、前回提示した1995～96年型を想定して、今週押し目が入れば買いの姿勢を継続する。

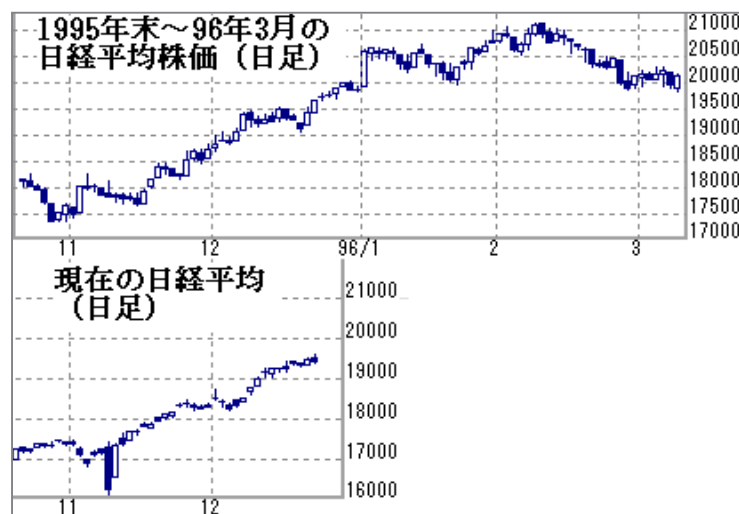
先週は「注目すべきは1996年の大発会が19,945円で始まり、引け値が20,618円と前年末比750円高の大幅値上がりとなった。その勢いは6月まで続き、そこで22,750円の天井を付けた」と述べた。これが年末年始に発生する可能性がある。

今週の押し

そろそろの時間帯に入る

推奨しているユーロドルの売りに関して先週次の通り述べた「今週は水星逆行から始まるのでダマシの可能性も否定できない。日柄的にはまだ若い、念の為に売りポジションは3分の1程度利食いしておいて損はないものとする。仮に今週反転した場合、現在上値抵抗線となっているチャンネルライン下限、数値にして1.05を引け値で連続して突破できるかに注目したい。更に1.06付近にある23日移動平均を引け値で突破すると底打ちの可能性が高くなる。ただ、実際にそうなるまで基調は依然として弱気。戻り売り方針を踏襲する。逆行開始日(12月19日)翌日である20日に1.0352まで下落して反発。下降チャンネルライン下限で止まっている。水星逆行期はテクニカル信用度が薄れる。逆行中間点である28～29日付近までダマシの上げがあるかも知れない。この逆行の合言葉“利食いは早く”に則って利食いしておいて良かったと思う。少なくとも、11月、12月の高値を結んだラインを引け値で突破しない限り

1996年大発会同様、2017年1月大発会が大幅続伸となれば、700円高も想定内。今週は日足ベースで95年末から96年のチャートを掲載しておくが、96年1月4日の足に注目しておきたい。



売り玉は保持。1.0割れで利食いして様子を見たい。売りの日柄は満ちかけている。底打ちシグナルは引け値で69日移動平均を超えたところ。そのプルバックが買い場となろう。



アストロカレンダー

永井 元

間もなく1年が終わる。今年の漢字は「金」。最近3回目。

金の意味は、オリンピックの金メダル、政治の金、トランプ次期大統領の金髪等を語らしい。しかし秘めた意味は金を買えという事かもしれない。最近あまり話題にならなくなったが、金需要が目先にならなくて、近い将来需要と人気が出るものと予測する。下がっても4,000円前半までで、これが4,000円を割り込むようなイメージは沸かない。

株価も2万円台乗せが時間の問題になったようで、ダウも2万円を乗せよう。人々が安心して、アベノミクスをどう言い始めた矢先、悪夢は静かに突然押し寄せよう。もしかすると87年のブラックマンデーと似た構図かもしれない。来年どこかで暴落し、すかさず立ち直り、その2年後に峠を迎えてバブル崩壊か。

今は静かに金地金を買い込むのが良さそうだ。1kgとかの大型では換金が出来なくなる恐れがあるので、100gやそれ以下の現物を収集するのがよからう。

さて、元旦あたりに地震の暗示が出ている。今月12月21日の冬至図から分析すると、日本の東側、北方領土あたりから東が該当するかもしれない。

国内にあるとすれば、月末の新月前後か。備えあれば憂いなし。

アストロカレンダー 1月 永井 元

	天文現象	注目マーケット		天文現象	注目マーケット
1 日	火星・海王星	地震?	16 月		
2 月			17 火	冬至	小豆
3 火			18 水	月赤道通過	為替・小豆・ゴム
4 水	地球近日点通過 水星・金星60度	全マーケット	19 木	水星西方最大離角 火星・土星90度	株式
5 木	月赤道通過	為替・小豆・ゴム	20 金	下弦	
6 金	上弦		21 土		
7 土			22 日	月最遠	
8 日	水星逆行終了	全マーケット	23 月		
9 月			24 火		
10 火	月最近		25 水	月赤道最南	穀物
11 水	月赤道最北	穀物	26 木		
12 木	海王星東方最大離角 金星・火星90度	全マーケット	27 金		
13 金	金星・海王星合	天候不順	28 土	新月	全マーケット
14 土			29 日		
15 日			30 月		
			31 火		

今週の相場風林語録

小知、小策用いるべからず

なまはんかな知識や小手先の手法で、物事は成功しない。

今週の九星★波動

知ったら仕舞…

南雲 紫蘭

「知ったら仕舞」その第一幕、とでもいえば良いでしょうか。想定よりもはるかにタカ派的であったFOMC声明文を見て、マーケット参加者は仰天、ドル買いに走りましたが、そのタイミングがドル金利とドル円相場の一旦の天井となりました。

テクニカル的には「120円まで何も無い、真空地帯」と思われていただけに一気に上伸するかと思いきや、118.80近辺で見事に頭を打たれて、その後は調整色が濃くなっています。

気が付けば、1MMの投機的ポジションもドルロング/円ショートに大きく傾き、最近敗色濃厚なミセスワタナベもロングしているとされていますから、「曲がり屋に向かえ」という定石からは「年初の知ったら仕舞」は何か、ということを考えるのはとても大切です。冷静に考えて「知ったら仕舞」になりそうなのは、政治一特にトランプ新大統領に対する過大な期待の落剥こそ恐れるべきでしょう。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (376)

中原 駿

ある日、牧山が不在の際、上野が常務である下原に直接呼ばれたことがあった。

率直に言って牧山はどうか、ということであった。

上野は慎重に言葉を選びつつも、牧山ははっきり言って時代遅れである、と伝えた。

牧山のように、一挙一投足に細かく指示を出したり文句をつけてしまうと、部下はついて行き難い。

そうでなくても深夜残業、過酷労働は当たり前の職場。パワハラやセクハラが問題になるのここから30年後の話である。

キツイ労働は所与のものとしても、受け入れるからにはそれなりのゆとりや癒しが欲しい、というのは当然ともいえた。

第六感の 強気型サイクル到来中



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

1年サイクルからは2015年の高値が視野に入る

ドル円相場は117.50を挟んで上下1円幅の動き。クリスマス前の閑散期が終り、年末年始に向けて相場が始まる。116.50以上が維持されていれば、依然として上値模索の展開が続ぎ、120円台を狙えるだろう。

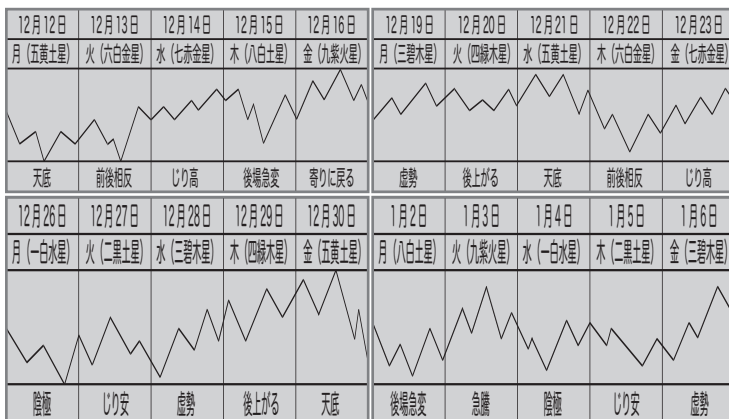
ただ7～11週サブサイクルが今週は7週目に入り、ボトムを付ける時間帯に入ってくる。一旦天井を付ければ2～3週の調整が入るのが通常の強気型サイクルのパターン。このパターンであれば、調整は上昇幅の23～38%以内に留まる。

11月9日安値101.19が現行サブサイクルの起点になり、ここまでの高値は12月15日に付けた118.56。従って、この高値が更新されるまでは上述の調整レベルは114.60～111.98となる。

1月調整が入れば、再び買いなる相場と見ている。サブサイクルベースでは110円を割りこんで引けるまでは買いが有利の相場。

ドル円相場には中期として1年サイクルが存在している。この起点は6月24日の99.04。次のボトムは6月24日±2カ月に到来する。この1年サイクルは新5年サイクルの第1位相。従って、中立型（センタートランスレーション）にならない限り、通常は爆発的な上昇を示す超強気型サイクルになる可能性が高い。この場合、天井を付ける時間帯はサイクル期間（1年）の76～84%の時間帯。つまり、今年6月安値から40週を過

九星波動は1月5日から九紫火星。いわゆる「波乱天井」ですが、月盤は基本逆転していますから、いきなり急落するも1月中旬から乱高下しながらも、最終的には大幅上昇となる相です。一次の弱気につれて年初から大きくやられないよう、ご注意あれ。



あまりにも神経にさわる言動は、なまじ長時間一緒にいるだけに耐えがたいものになる。

そうした若手からの厳しい声はいくつも届いていた。このままではグループ崩壊のリスクすらある、と上野は考えていた。

そして、上野がこれを諫言しても、牧山はそれを受け入れる相手ではなかった。もしかしたら、代わってもらうしかないかもしれない — 上野がそうした結論に到達したのは案外すぐのことであった。

下原に、婉曲に伝えながら、なんとかモラル、モチベーションが落ちないようにするには、暗に課長を交代すべきである、と伝えつつもであった。

しかし、この行為はサラリーマンとしては「組織人失格」とでもいうべき行動に捉えられてしまう。

下原常務はにこやかに本音を引き出すと、上野の人事異動を発表したのであった。

ぎてから天井が到来すると考えられる。今週はまだ27週目。このサイクル位相が正しければ、ドル円相場は2017年3月末までは天井は到来しないことを意味する

従って、1月以降調整が到来すれば、それは単なるサブサイクルボトムに向けた下げであり、一旦ボトムを付ければ、次の新サブサイクルの上昇期では現行サブサイクルの高値を更新すると予想される。このケースでは少なくとも2015年6月の高値をテストするか上抜くことも想定できる。しかし、それまでに110円を引け値で割ってくれば、この見通しは怪しくなる。既にご承知の通り、年前半ではユーロ圏各国で様々な選挙がある。ここでブレグジットやトランプ現象を引き継ぐような状況が到来するとユーロ危機が浮上し、リスクオフの円高が到来する恐れがある。来年前半も今年同様、政治的なイベントで波乱相場が到来すると予想されるが、結果が出るまでは不明だ。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第21回】NY金のサイクルについて（4）

先日『フォーキャスト 2017』執筆終了直後のメリマン氏へのインタビューを元に製作するラジオNIKKKIさんのラジオ特番の収録に参加したのですが、そこでメリマン氏はNY金に「50週サイクル」が存在するとコメント。これは先週の当欄や『フォーキャスト 2017』でも登場する11カ月サイクルの事です。1年は約52週なのでオーブも入れると50週となります。今回は週足でこれ以降のサイクルを検証して参ります。

先ず11カ月サイクルですが、週足で見ると46週、56週と来て今週56週目に入ります。今のところ55週目にあたる12月15日の安値でボトムをつけた可能性もあるのですが、まだ判りません。ただこのサイクルの起点が15年12月3日、その前のサイクルの起点が11月7日、そして更に前のサイクルの起点が12月31日なのでここ数年は冬にボトムが出現しやすいというアノマリーは適用出来そうです。

メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

年末年始の節目は水星逆行の節目と重なる

金融版投資日報も今号が年内最終号となる。一週お休みして1月9日号から再開するが、その間アストロロジー的に注意すべきはやはり12月19日～2017年1月8日までの水星逆行である。特に直近、逆行中間点（12月28～29日）付近で起きる主要天体位相をピックアップしてみると、【25日】土星・天王星トライン（120度）、金星・木星トライン、【26～27日】木星・天王星オポジション（180度）【28～29日】太陽・水星コンジャンクション（0度）、【29日】新月、天王星順行、【1月1日】火星・海王星コンジャンクション、【1月3日】金星サインチェンジ（水瓶座→魚座）と満遍なく長期短期を問わずに相場の節目出現時に発生しやすい天体位相が連なっている。

逆行開始日で反転しなかった相場は、しばしば水星逆行中間点で反転するケースが多いだけに注意が必要だろう。

このサイクルには2～3つのプライマリーサイクル（以下PC：通常15～21週）が入りますが、既に現行PCは起点を割り込んでいますので、サイクル内の最安値はボトム出現時につけるので、通常の日柄であれば1～2月に安値をつけるでしょう。

ただここ数年、相場は3回延長しています。長期サイクルがボトムをつける際、内部のサイクルは歪みが生じる事がしばしば。冬にボトムをつけやすいとなればサイクルが歪み、短縮PCボトム（11～14週）をつける可能性があります。もしそうであれば、相場は1月第2週までにボトムを形成して急反騰しているでしょう。今週末の時間帯は非常に重要です。



これと同じ形式で水星逆行終了日（1月8日）付近での天体位相をピックアップすると【5日】上弦、【7日】太陽・冥王星コンジャンクション、【10日】太陽・天王星スクエア、【12日】太陽・木星スクエア、満月、水星サインチェンジ（射手座→山羊座）【12～13日】金星・海王星コンジャンクションとなる。

更に水星逆行シャドウ期の終了場面（1月28日あたり）では【27日】金星・土星スクエア、【28日】新月、火星サインチェンジ（魚座→牡羊座）、【28～29日】水星・冥王星コンジャンクションが起こる。つまり今回の水星逆行は、節目となる時間帯と（相場の転換点として）重要な天体位相が重なっている。

天体位相の集中度を考えると、今回の水星逆行は中間点付近が変化日として最も強力なのではないかと筆者は考える。またここまで挙げた時間帯は『フォーキャスト 2017』で注目されている2つの天体位相「木星・天王星・冥王星T字スクエア」と「土星・天王星トライン」の初回形成場面、ならびにトランスレーションの時間帯でもあるという点には注意したい。

WEBサイトより一足早く、2週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 12月26日（月） 年末最後の重要変化時間帯、オーブは1週間
- 12月27日（火） 木星／天王星180度
- 12月28日（水） 高揚するも落とし穴に注意
- 12月29日（木） 新月とプレグジット以降の天王星逆行終了
- 12月30日（金） 動きなし
- 12月31日（土） 良い年をお迎えください
- 1月1日（日） 新年おめでとうございます
- 1月2日（月） 今年は想定外が想定内の年に
- 1月3日（火） 為替市場動意付く
- 1月4日（水） 金相場はトレンド出現
- 1月5日（木） 今年は商品市場上昇年
- 1月6日（金） 不気味なTスクエアに月と太陽が絡む
- 1月7日（土） 週明け不穏な動きに警戒
- 1月8日（日） 相場世界、悲観者は大儲けはないが大損もない

*来週号はお休み。次回の発行は17年1月9日号です

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト 2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

「サイクル」「アストロロジー（占星学）」「テクニカル」
この3本柱で2017年の動向を予測！

アストロロジーでは2017年の水星および金星逆行の解説に加え、有力政治家の出生図やFRB、NYSE、そして米国の始原図から予測。主要天体位相の発生時間と始原図とを重ね「何故この時期は重要なのか」を解明。『フォーキャスト 2016』目玉解説の土星・海王星ウェーニングスクエアは終了したが、その影響は2017年中もまだ残る。メリマン氏はこの点を「世界無責任時代（ただし、もれなくスケープゴート付き）」という課題をつけて「土星はコントロール、統御を意味する。特に、政府や金融界のリーダー達のように権力の座にある人々が持つ、統御への欲求、衝動を象徴。しかし海王星は境界など知らないし、とりわけ境界線、眼界、統御という意識が欠落している。…状況が制御不能となりヒステリー状態になっていくという連発の反応は、何れも中央銀行とインフレーションの問題に限ったことではない」と述べていた。2016年に起きた事象は「制御不能」と「無責任」という言葉は非常に的確だ。

恐らくこのスクエアの解説も行いつつ、次の一手が予測されるのではないだろうか。
幾つかの主要相場では長期相場サイクルの節目に入っており、アストロロジーとサイクル、どちらでも必読の内容となるだろう。

レイモンド・メリマン 著 秋山日揺香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円（税込・送料別）

遂に発売開始！メリマンCDもWEBにて販売中！

簡単・便利な「投資日報オンラインショッピング」もご利用ください。

お問い合わせ：投資日報出版（株） <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町 3-12-11GRANDE 人形町 6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444